

後原遺跡 5

— 第24次調査 —

大野城市文化財調査報告書

第177集

2020

大野城市教育委員会

うしろ ぼる
後原遺跡 5

— 第24次調査 —

大野城市文化財調査報告書

第177集



2020

大野城市教育委員会

序

福岡県大野城市は福岡平野の南部に位置し、その市名は日本最古の朝鮮式山城「大野城」に由来します。市域は中央部がくびれ、南北に細長い形をしていますが、北部に大野城跡、中央部に水城跡、南部に牛頸須恵器窯跡と、それぞれ国指定史跡を配し、それらを中心に数多くの文化財を擁する歴史豊かな街です。

後原遺跡は、市域のほぼ中央部、白木原1丁目一帯に位置します。文献によると一帯は江戸時代の白木原村があったところとされ、これまでの発掘調査の成果でも、そのことが証明されつつあります。白木原村は明治22年に他の村と統合され、大野村となり、現在の大野城市へとつながっていきます。

これまで24回の発掘調査を実施してきましたが、江戸時代のそれぞれの屋敷を区画する溝や村の北西には共同墓地が営まれていたことが分かってきています。

本書は、後原遺跡の範囲のほぼ中央に当たる場所で実施した第24次調査の成果を収めた報告書ですが、近・現代の攪乱が著しかったものの、中世の区画溝の一部や土坑などを検出し、これまでの発掘調査で確かめられた江戸時代より更に古い時代の白木原村が垣間見える成果をあげることができたと思われます。

本書が学術研究はもとより、広く一般に周知され、考古学の深化や地域史の解明等に活用され、文化財愛護の精神を醸成する一助になれば幸いです。

最後になりましたが、現地での発掘調査および報告書作成・刊行にあたり、ご理解ご協力いただいた株式会社オープンハウス・ディベロップメントをはじめ関係各位に厚くお礼申し上げます。

令和2年3月31日

大野城市教育委員会
教育長 吉富 修

例 言

1. 本書は、大野城市白木原1丁目267番5他で計画される共同住宅建築に伴う事前の発掘調査として実施した後原遺跡第24次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は大野城市教育委員会が調査主体となり、事業主体者である株式会社オープンハウス・ディベロップメントの委託を受け実施した。
3. 本書に使用する実測図は、遺構を澤田康夫、柴田剛、山元瞭平、一部を株式会社イビソクに委託した。また、遺物は吉田薫、小嶋のり子が作成し、製図は吉田が行ったものを使用した。
4. 本書で使用する写真は遺構写真を澤田、全景写真を（有）空中写真企画に委託した。遺物写真は写測エンジニアリング（株）に委託し、牛嶋茂が撮影したものを使用した。
5. 本書の遺構平面図中の方位は、座標北を表し、座標は国土座標系（第Ⅱ系）を使用している。
6. 本書の遺跡分布図は国土地理院発行の25000分の1地形図『福岡南部』を使用し、近隣の遺跡包蔵地分布図を参考に作成した。
7. 本書の執筆・編集は澤田が行った。
8. 本書掲載の遺物・写真は、大野城市教育委員会で保管している。

本文目次

| | |
|------------|----|
| I. はじめに | 1 |
| II. 立地と環境 | 3 |
| III. 調査の内容 | 5 |
| IV. まとめ | 15 |

図版目次

| | |
|------|-----------------|
| 図版 1 | 調査区東半全景、調査区西半全景 |
| 図版 2 | SD01・03、SD04・05 |
| 図版 3 | SK05、SK06、SK11 |
| 図版 4 | 出土遺物 |

挿図目次

| | | |
|--------|-------------------|----|
| 第 1 図 | 遺跡位置図（調査次数） | 2 |
| 第 2 図 | 周辺遺跡分布図 | 4 |
| 第 3 図 | 遺構配置図 | 5 |
| 第 4 図 | 2・3・5号土坑実測図 | 9 |
| 第 5 図 | 6・7・11号土坑実測図 | 11 |
| 第 6 図 | その他の遺物（石・土製品）実測図 | 15 |
| 第 7 図 | 溝出土遺物実測図 | 16 |
| 第 8 図 | 土坑出土遺物実測図 1 | 17 |
| 第 9 図 | 土坑出土遺物実測図 2 | 18 |
| 第 10 図 | 土坑及びその他の遺構出土遺物実測図 | 19 |
| 第 11 図 | その他の出土遺物実測図 | 20 |

I. はじめに

1. 調査の経過

後原遺跡は市域のほぼ中央、大野城市白木原1丁目周辺に広がる江戸時代後半を中心とした時期に営まれた集落遺跡で、「筑前国続風土記拾遺」には白木原村の記述が詳しい。また、寺の過去帳等によると更に遡り、明応8年（1499）に現時点で最古の白木原村の記述があり、少なくとも16世紀には白木原村は存在したものと思われる。一帯では交通の便の良さから高層マンションが林立し、そのたびに実施される発掘調査により江戸時代の終り頃の遺構が主に集積されていて、近世集落の構造や集落環境を知る貴重な遺跡とされる。過去に1地点、23次の24回に及ぶ発掘調査が実施されており、今回の調査は第24次、25回目の調査である。

調査地は白木原1丁目267番5他で、高層共同住宅建築に先だって、当該地に埋蔵される文化財の取り扱いについて事前の協議が申し入れられた。当該地一帯は宅地化が進み、旧地形が改変されていたが、試掘調査を実施したところ、遺構が確認されたので、この試掘調査の結果を受け、事業者と当該文化財の保護措置について協議を重ねた。

協議の結果、今回の工事では敷地の殆ど全域で遺構面以下に掘削が及び、影響を受けることとなるので、全面的に発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

発掘調査は平成30年10月29日から調査区の設定等を行い、重機による表土剥ぎを始めた。排土を場内で処理するため、2回に分けて調査を実施することとしたが、新規に盛土された真砂土が予想以上に厚く、排土の置き場が狭かったため、予想以上に手間取った。調査区のほぼ東半部をまず表土剥ぎし、I区として調査を進めた。11月19日から作業員を投入し、遺構検出及び検出した遺構の掘削を開始した。I区は12月18日に図面作成等終了し、埋戻しをしながら、西半のII区の表土剥ぎを進めた。II区についても排土置き場に苦勞したが年内に一定範囲を剥ぎ終え、新年の平成31年1月7日から作業員を再度投入し、遺構の検出・掘削を開始した。この時期にしては天候に恵まれ、作業は順調に進み、1月23日にバルーンによる全景写真を撮影した。その後、遺構の実測図を作成し、主な遺構の断ち割り作業等を行い、1月25日で作業員は終了。並行して進めていたII区の埋戻しも目途が付き、1月30日に現場での作業をすべて終了した。調査面積は約1200㎡である。その後令和元年度に整理作業を実施し、本書刊行の運びとなった。

2. 調査の組織

発掘調査及び本書発行の整理作業にかかる調査体制は以下のとおりである。

| | |
|-----------|------------------------------|
| 教育長 | 吉富 修 |
| 教育部長 | 平田 哲也 |
| ふるさと文化財課長 | 石木 秀啓 |
| 係 長 | 佐藤 智郁、林 潤也、上田 龍児、徳本 洋一（30年度） |
| 主 査 | 徳本 洋一 |
| 主任技師 | 上田 龍児（30年度） |

| | |
|-------|--|
| 技 師 | 山元 瞭平 |
| 主任主事 | 秋穂 敏明 |
| 主 事 | 柴田 剛 (30年度)、坂井 貴志 (30年度) |
| 嘱 託 | 澤田 康夫、三浦 萌 (30年度)、木原 堯 |
| (庶 務) | 西村 友美、永松 綾子、呉羽 京子 (30年度) |
| 整理作業員 | 村山 律子、白井 典子、仲村 美幸、小嶋 のり子、松本 友里江 津田 りえ、吉田 薫、氷室 優、古賀 栄子 |



第1図 遺跡位置図 (調査次数) (1/2,500)

Ⅱ．立地と環境

1．遺跡の立地

大野城市は南北に細長く、中央部がくびれる鼓形をしており、北部には四王寺山山塊とそこから南西に派生する低丘陵群、南部には牛頸山山塊とそこから派生する低丘陵群があり、両者に挟まれる中央部は御笠川による沖積地及び氾濫原の低地をなしている。南部の牛頸山は脊振山系の一角をなし、地盤は早良型花崗岩で、表層はその風化土である真砂土が覆う。この牛頸山から派生する牛頸川は北流し、市役所近くで御笠川と合流するが、この両河川に挟まれた一帯は沖積平野が形成され、後原遺跡は三角州や氾濫原堆積層を基盤とする微高地に立地する。

2．歴史的環境

大野城市にはその地勢に応じて、様々な時代の遺跡が営まれている。後原遺跡でも石鏃から現代陶磁器まで、その多寡はあるものの、遺物が出土している。ここで、遺跡周辺の歴史的環境を概観してみたい。

まず、縄文時代の遺跡は少ないが、北部の釜蓋原遺跡では細石刃や縄文早期の押型文土器や石鏃が出土している他、本遺跡周辺では原ノ畑遺跡、石勺遺跡など、散発的に遺物が認められる。弥生時代になると、市域でも遺跡の数は増加するが、遺跡は市域の北部に多く、御陵前ノ椽遺跡、中・寺尾遺跡、塚口遺跡で甕棺墓等が営まれる。本遺跡の周辺でも石勺遺跡や、御供田遺跡等で遺構が見つかるが、市域南部では遺跡の出現度は低い。続く古墳時代では、首長墓級の前方後円墳は認められないが、御陵古墳群周辺からは三角縁神獣鏡の出土が伝えられ、古墳時代初期の有力者の存在を窺わせる。中期では30m級の円墳である笹原古墳があり、帆立貝式の成屋形古墳（太宰府市）とともに御笠川流域の盟主的な勢力の存在を示す。また、後期になると、初期の横穴式石室を持つ塚原古墳群等が営まれるが、遺跡数としては少ない。その後、周辺の山麓には通有の横穴式石室を持つ群集墳が営まれる。持田ヶ浦古墳群、善一田古墳群、王城山古墳群等がある。珍しい例として、梅頭窯跡では須恵器窯を転用した墳墓が見つかる。集落遺跡としては仲島遺跡、石勺遺跡、村下遺跡等が弥生時代から継続して営まれる他、瑞穂遺跡、原ノ畑遺跡等が新たに出現する。中期には遺跡は減少するが、後期になって、仲島遺跡、塚原遺跡群、日ノ浦遺跡群、上園遺跡、薬師の森遺跡などで集落が展開する。また、南部の牛頸山山麓では、牛頸須恵器窯跡群が操業を開始する。続く飛鳥、奈良時代では水城、大野城が築かれ、太宰府の防衛が図られる。牛頸窯跡群は隆盛を迎え、牛頸ダム周辺の窯跡群や、小田浦、ハセムシ等の多数の窯跡が確認されている。中世では御笠の森遺跡で方形区画溝に囲まれた集落が見つかり注目される。江戸時代では御笠の森遺跡、雑餉隈遺跡、屏風田遺跡等で遺構・遺物が見つかり、御笠の森遺跡は『筑前国続風土記拾遺』に記載のある山田村の集落移転とその動態が一致し、注目される。後原遺跡も同文献で、記述のある白木原村の一部にあたること明らかにしている。

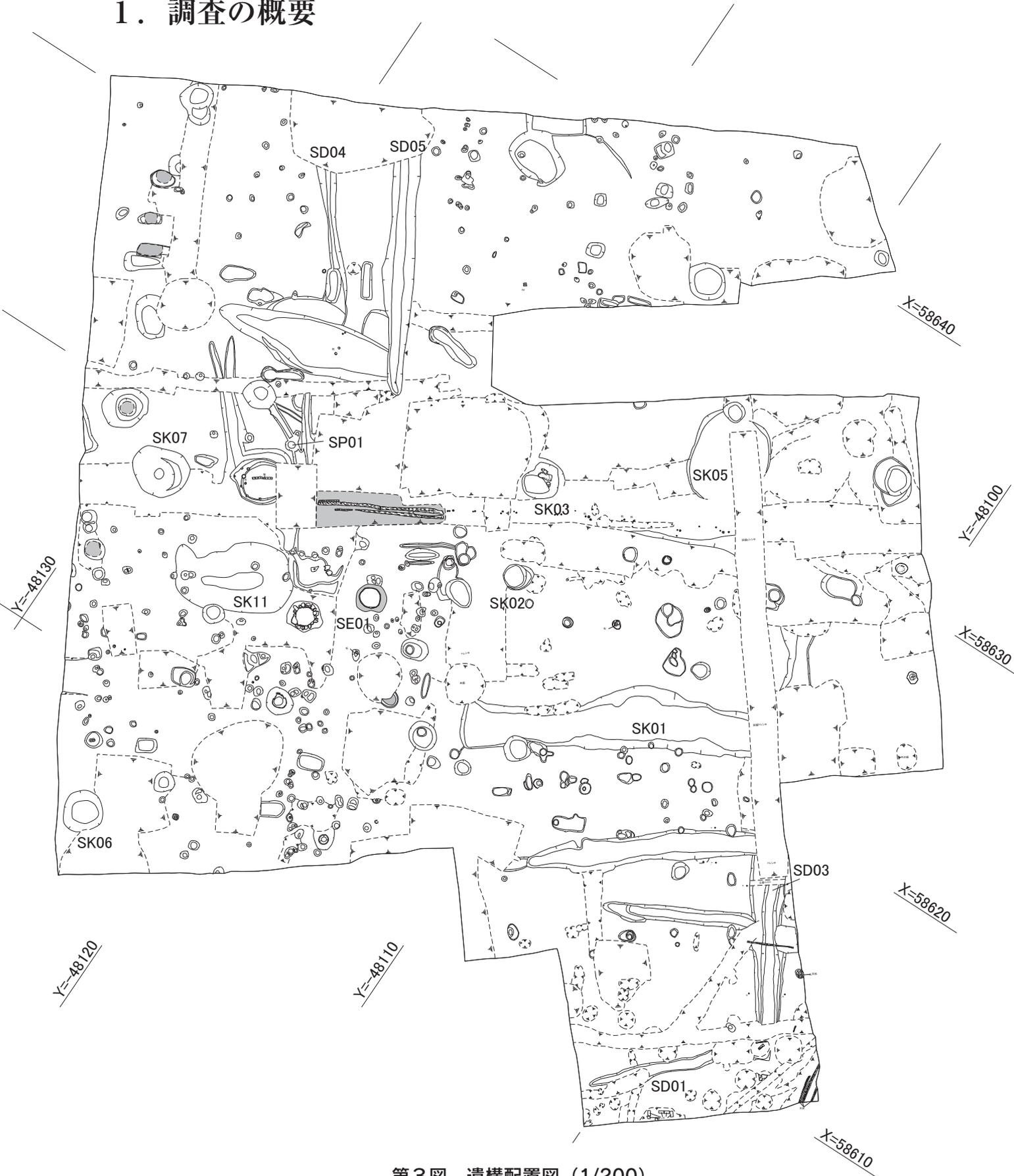


1. 井相田C遺跡 2. 仲島遺跡 3. 麦野A遺跡 4. 麦野B遺跡 5. 川原遺跡 6. 御笠の森遺跡 7. 宝松遺跡
 8. 村下遺跡 9. 雑餉隈遺跡（大野城市） 10. 雑餉隈遺跡（福岡市） 11. 塚口遺跡 12. 御陵古墳群
 13. 御陵前ノ椽遺跡 14. 唐山遺跡群 15. ヒケシマ遺跡 16. 中・寺尾遺跡 17. 森園遺跡 18. 松葉園遺跡
 19. 善一田古墳群 20. 王城山古墳群 21. 古野古墳群 22. 薬師の森遺跡 23. 雉子ヶ尾遺跡 24. 笹原古墳
 25. 釜蓋原遺跡 26. 立石遺跡 27. 駿河遺跡 28. 先ノ原遺跡 29. 春日公園内遺跡 30. 瑞穂遺跡 31. 石勺遺跡
 32. 御供田遺跡 **33. 後原遺跡** 34. 原ノ畑遺跡 35. 池田遺跡 36. 本堂遺跡 37. 上園遺跡 38. 谷川遺跡
 39. 島本遺跡 40. 水城跡 41. 官道（水城西門ルート） 42. 官道（水城東門ルート）

第2図 周辺遺跡分布図（1/25,000）

Ⅲ. 調査の内容

1. 調査の概要



第3図 遺構配置図 (1/200)

調査地は、1994年に実施された都市計画道路大野城駅前線の建設に伴う発掘調査で遺跡が確認されて以降、主に大規模共同住宅の建設に伴って発掘調査が実施されてきた。今回の調査は第8次、10次、22次、A地点に囲繞される区画である。調査地点は、これまでの調査で旧白木原村の「本村」の域内と考えられており、その中心的位置にある地祿神社の参道沿い、南75mの所に位置する。平成29年の航空写真を見てみると敷地内は規模の大きい建物があり、周囲は木立が覆い茂っている。調査開始時点ではこれらが全て除去され、真砂土による整地がなされていた。

調査地の基本層序は黒色の旧耕作土・茶褐色土・青灰色シルト（検出面）・明黄褐色粘質土（検出面）の順であるが、調査区の南半は真砂土による盛土が2m近くなされ、北半は明黄褐色の遺構検出面に重機の爪痕が大きく残るほど削られ、その直上にガラの混入した攪乱土が載っている。このことから、旧地形は南から地祿神社のある北方向に向かって高くなる地形を呈するものと思われる。遺構は近・現代の攪乱が激しく、近世以前の遺構を識別するのは困難であったが、出土遺物の検討から当該期の遺構として判別したものはあるが、溝、土坑、ピット、性格不明遺構などを検出した。遺物は石鏃、須恵器、土師器、輸入陶磁器、など僅かながら出土したが、国産陶磁器（染付）、瓦、瓦質土製品が殆どである。

2. 遺構と遺物

今回の調査では先に述べたように、近・現代の攪乱が広範に及び、石組みや平瓦を並べて筒状にした井戸状遺構などはモルタルが使われるなど近・現代の遺構と考えられ、今回報告では記述を割愛した。出土遺物から見て、多少の混ざりこみがあると懸念されるが、近世期以前に属すると考えられる遺構を中心に述べる。

（1）溝状遺構

調査区全体に溝状の遺構が検出されたが、木材、板、土管等が埋め込まれた暗渠排水の為の溝が多い。特に、調査区東南部は湿地だったようで、縦横に暗渠排水の為の溝が集中する。

SD01（図版2、第3図）

調査区南端で検出した東西方向に延びる小溝である。残存状態は悪く溝底を辛うじて残すのみだが、攪乱で屈曲部を失うものの、埋土が同一であることから、北行するSD03に接続すると思われる。出土遺物はない。

SD03（図版2、第3図）

調査区南東部で検出した南北に延びる小溝で、両端とも攪乱されているが、先のSD01と一連のものである。幅75cm、深さ30cmと残存状態は良くない。埋土はオリーブがかかった黒色土で、粘質が強い。

出土遺物（図版4、第7図）

土師器（1～5）いずれも小片からの復元である。1、2は小皿で、口径8～9cm、器高1.8cm程に復元される。底部は糸切りで、他はヨコナデされる。胎土に砂粒は少なく、焼成良好である。1は橙灰色、2は茶灰色を呈す。3～5は杯で、復元口径が11cm程の小型のものである。小皿と分量は近いものの口体部が長く外へ開く形態である。底部糸切りで、他はヨコナデによる。3はヨコ

ナデにより引き上げた口縁端部をロクロを止めて更に薄く引出しており、口縁端は手捏ね様に波打っている。何れも胎土に砂粒は少なく精良である。灰黄色を呈し、焼成良好である。

瓦質土器（6） すり鉢の底部片である。薄い粘土円板に体部を貼り付け、その境の内面に新たに粘土を充填・補強して底部を成形している。接合部の外面は指で押さえたまま、不整である。体部内面の櫛目は摩耗して不明確だが、底部と体部との境に三角形の櫛目の当りが廻る。胎土に白細粒と輝石粒が多く含まれるが、砂粒は含まず精良である。黒灰色を呈すが暗橙色を帯びた部分もあり、焼成は不完全である。

陶器（7・8） 7は碗の口縁部片である。口縁端部は内面に小さな凸線状を廻らし、外へ少し膨らまず形態である。精製された黄茶色の胎土に薄く透明釉をかける。焼成は良好である。8は皿の底部片と思われる。高台が付くが、高台内を抉る様に削り、外面は殆ど削り出さないの、不明瞭な高台となる。砂粒を僅かに含む黄白色の胎土に白色釉を高台も含め、やや厚めにかける。見込み部分と高台畳付部分に胎土目跡が残る。

磁器（9） 龍泉窯系青磁の杯の破片資料で、高台が付くものと思われる。口縁部を屈曲させ、端部上面を平坦にする。体部外面に鎬蓮弁文を廻らす。灰色の胎土に濃いめのオリーブ色の釉を厚めにかける。太宰府分類の龍泉窯系青磁杯Ⅲ類に属する。

SD04（図版2、第3図）

調査区の北辺で検出した南北方向に延びる溝である。両端とも新期の攪乱により全様は不明である。幅45cmを測り、溝断面は逆台形である。

出土遺物（図版4、第7図）

瓦質土器（10） 径3.3cmの棒状の製品で中空である。長さ9cm弱が残るが、器物の脚かあるいは土瓶の取手のようなものの端部である。胎土は砂粒が少なく精良で灰色を呈し、外面黒色の瓦様に焼き上げている。

磁器（11） 急須と思われる染付の小片である。短く直立する口縁部で、内面に蓋受けの小さな突起を作りだす。口縁部内面は端部から突起まで無釉である。器壁は薄く仕上げられ、外面に草花文が施される。

SD05（図版2、第3図）

調査区の北辺にSD04と並行して延びる溝である。この溝も南北端を攪乱により乱されているため、全様は知れない。埋土は溝底に黒青色の粘質土が堆積しているが、その上層は黄褐色の地山と同系の土が厚く堆積しており、溝自体も二段掘りとなっていることから、板囲い状のもので暗渠としていたものと思われる。

出土遺物（第7図）

瓦質土器（12） 小型の鉢の口縁部片と思われる。口縁部は器壁を厚くしながら、丸く内側へ折り曲げられる。口縁端部内面から体部外面は丁寧なミガキが施され、内面はヨコナデで仕上げられる。外面は黒色化が著しいが、内面は黒色化が進まず、茶色味を帯びている。胎土に砂粒は少なく、焼成は良好である。

磁器（13） 肥前系の染付皿である。口縁部は内湾しながら短く立ち上り端部は薄く仕上げる。断

面三角形の小さな高台を削り出すが、高台内は深めに削り出される。見込み中央に手書き五弁花が入れられ、口縁部内側面には帯状濃み地に白抜きの波様文を廻らす。外面には唐草文を入れる。また、底部及び高台外面、高台内に圏線を廻らす。

(2) 土坑

調査区では多くの土坑を検出したが、ほとんどは近・現代の攪乱による土坑で、ここでは、埋土の特徴から近・現代のものではないと考えられる遺構について述べる。

SK01 (図版1、第3図)

調査区の中央部付近で検出した東西に延びる、溝状の長い土坑である。東端は攪乱を受けており、全様がつかめないが、西端は直線的に切れており、土坑とした。幅1.5m、長さ13m程を検出した。深さは20~30cm程である。埋土は茶系の黒色土で、砂質のものが主体を占める。

出土遺物 (図版4、第8図)

須恵質土器 (21) すり鉢の口体部破片資料である。直線的に外反する口縁部は端部を平坦にし、外方へ小さく引き出す。内面はハケ調整、外面は細かいハケと指頭痕が残る。内面に3条のカキ目を入れる。胎土は砂粒が少なく精良である。色調は明灰色で焼成は軟質である。

陶器 (16・20) 16は椀の高台部分である。天目風の黒茶色の釉を高台壘付を除く全体に施す。灰色の胎土は砂粒を含まず精良で、焼成は堅緻である。20は鉢の高台部。断面台形に削り出した高台はどっしりとしている。内面に白釉をかけて櫛の波状文を施す。胎土は赤褐色で精良。焼成は良好である。高台外面に白釉の付着が認められる。

磁器 (14~19) 14・15・17は肥前系の染付。14は外面に菊花文と草花文を交互に配す。内面は無文。15は見込みを蛇ノ目剥ぎする。壘付が無釉の他は全面的に施釉する。外面底部に圏線、中位に施文するが文様は不明。17は皿の高台部である。見込みに圏線と中央部に細線の施文をするが全様は不明である。18は白磁小皿の高台部資料である。外面は施釉せず、内面に白濁色の釉をかける。19は龍泉窯系青磁椀で、口縁部外面に雷文帯、体部内面に草花文様が付けられ、オリーブ色の半透明の釉を施す。

SK02 (図版1、第4図)

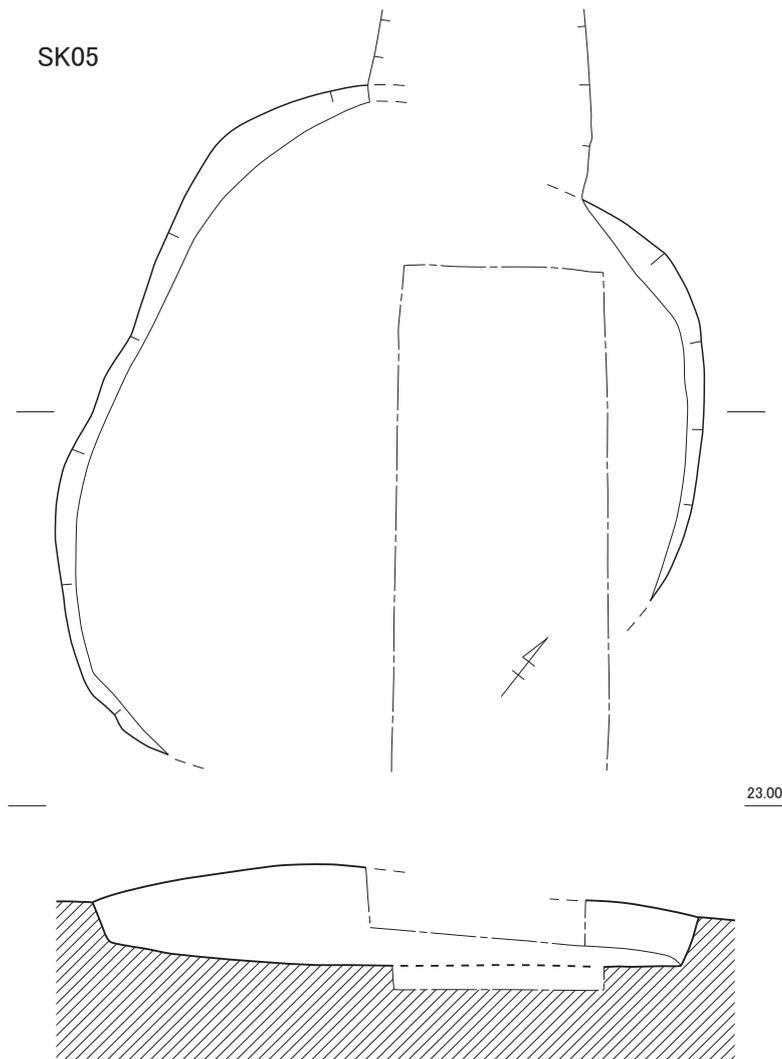
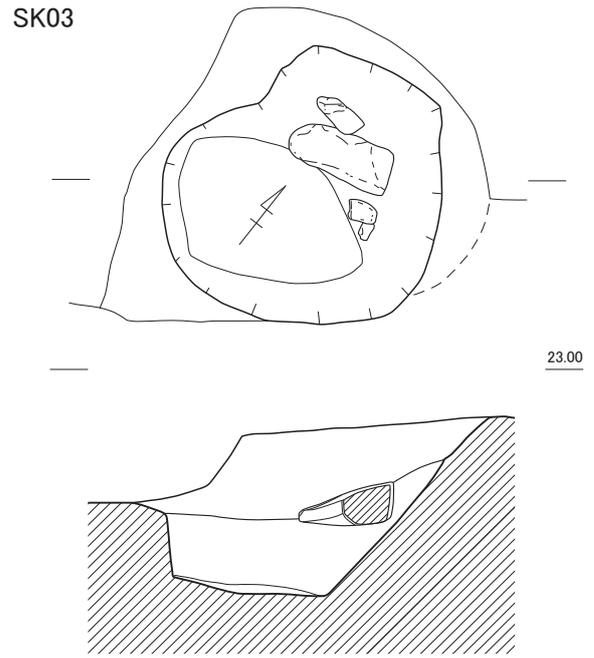
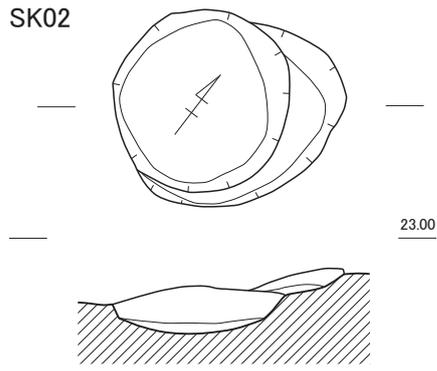
調査区のほぼ中央で検出した土坑で、径約1mの円形のプランを呈する。上部は削平され、深さ20cm程を残す。東側に階段状を呈す掘り込みがあるが、切り合い関係は不明確であった。性格は不明である。

出土遺物 (第10図)

土師質土器 (48) 鉢の口縁部である。直線的に外反する口縁で、やや肥厚させながら端部は丸く仕上げる。内面は細かいハケ目、外面はナデにより仕上げられるが、外面は端部にかけてハケ目が残る。茶橙色で焼成は堅緻である。外面に煤が付着する。

SK03 (図版1、第4図)

SK02の北4.5mの所で検出した。上位は攪乱を受けて削平が及ぶが、不整楕円形のプランを呈する。土坑中位に掘方に貼り付くように枕状の石を検出したが、その用途は不明である。



第4图 2·3·5号土坑实测图 (1/40)

出土遺物（第8図）

土師質土器（22） 鍋の口縁部小片である。やや丸みを帯びる体部に、内湾して立ち上がる口縁部が付くもので、その境は屈曲し、内面に稜が廻る。口縁端部は平坦にし、中央を凹ませる。口縁部内外ともヨコナデ、体部は内外ともハケ目が残る。茶灰色を呈し、焼成は良好である。外面全体に煤が付着する。

磁器（23） 龍泉窯系青磁碗の高台部資料である。外面に雑なヘラ書き蓮弁文、見込みには沈線を廻らし中央に草花文を描く。淡い緑色の釉が全体に厚めにかかるが、高台内には施釉されない。太宰府分類の碗Ⅳ類に属すと思われる。

SK05（図版3、第4図）

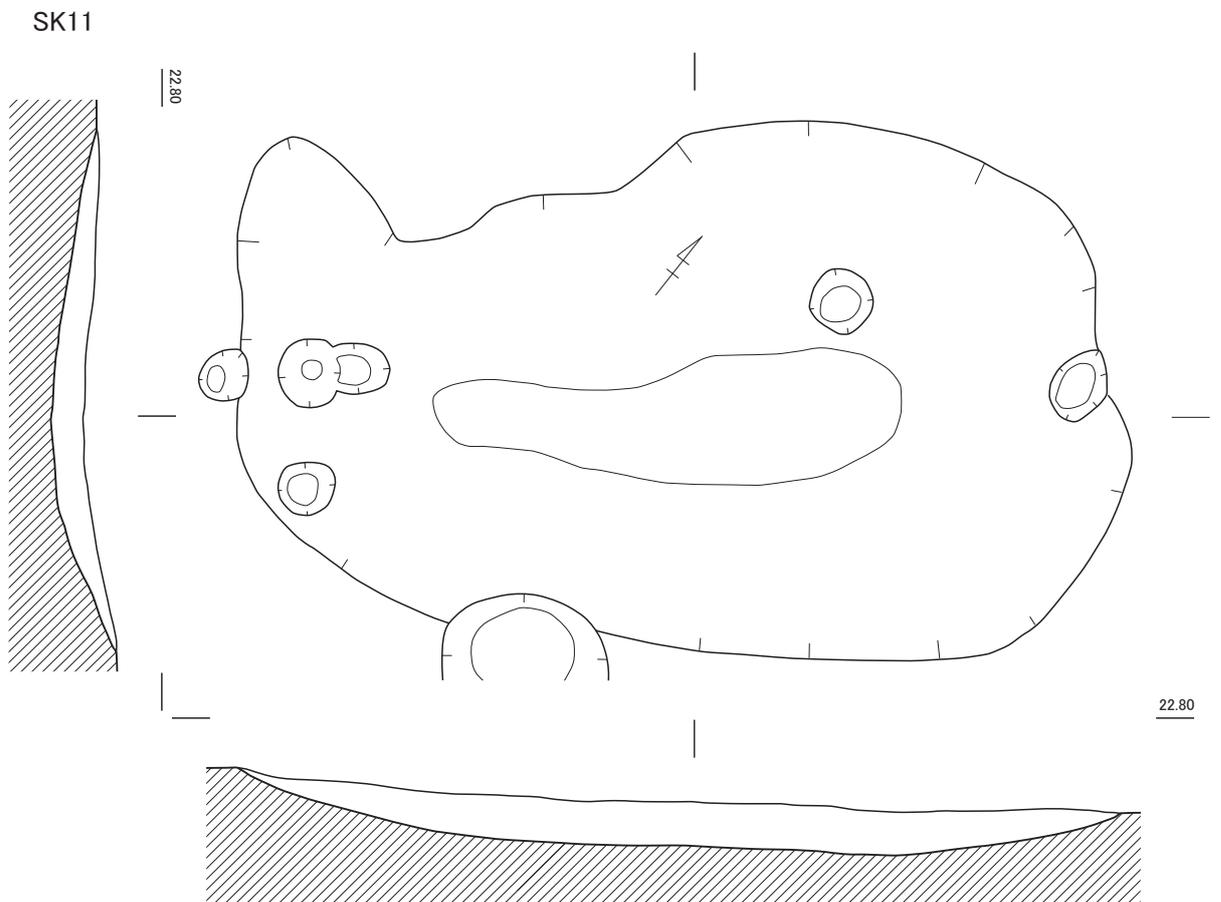
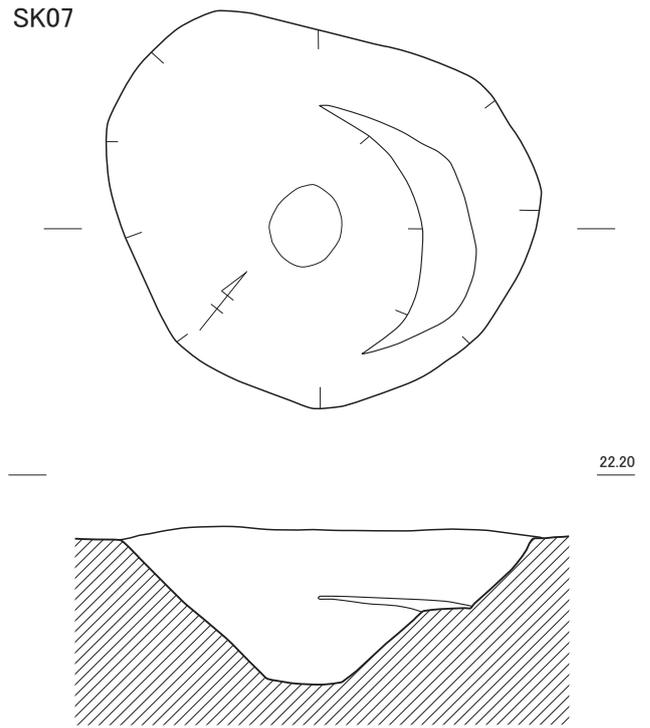
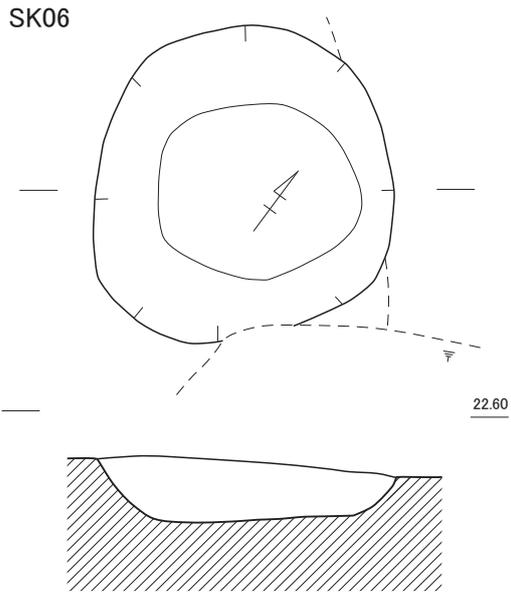
調査区中央のやや東寄りの所で検出した大きめの土坑である。攪乱に寸断されて、全様が不明確であるが、3.8×3.2mの隅丸方形に近い形のプランのものである。埋土中に人頭大の石が多く入り込んでいたが、何れも浮いた状態で、投げ込まれた状態であったので、最終的には除去した。深さ40cm程が残る。本土坑からは土師器、瓦質土器、青磁、白磁が出土したが、染付は出土していない。

出土遺物（図版4、第9図）

土師器（29～31） 29・30は小皿で、底部糸切りである。29は復元口径6cm、乳橙色で焼成良好である。30は完形品で、口径7.2cmを測る。乳灰色で焼成良好である。31は杯の断片資料で、内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。底部糸切りで、口縁部内外はヨコナデ調整される。胎土は精良で焼成は良好である。

瓦質土器（32～36） 32・33はすり鉢。32は底部の断片である。底部と体部の境の外面には強い指ナデ痕が認められる。内面には4条の櫛目の当りが残る。胎土は精良で、焼成は良好。33は全様の知れる資料である。平坦な底部から直線的に外反する口体部が付く。口縁部はやや肥厚させながら端部を内側へ折り曲げ小さく上方へ突き出す。内面は横方向のハケで調整し、4条の櫛目を縦方向に施すが、3条の櫛目を一つ置きに斜めにクロスさせて入れる。底部との境周辺は使用により著しく摩耗している。外面は縦方向のハケ目調整されるが、底部と体部の境は強く指で押さえられ、その上から横方向のカキ目が入られる。また、体部は指頭痕が著しい。口縁端部はヨコナデ仕上げされる。灰黒色を呈し、焼成は良好である。34～36は湯釜の破片である。短く直立する口縁部を持ち、やや肩が張るタイプである。口縁端部は平坦面を成し、中央に沈線を入れる。34は頸部に沈線を廻らし、それに沿って2個の半円弧文を間隔を置いて配する。35は頸部に細い沈線を廻らし、それに沿って梅鉢文を等間隔にスタンプする。肩部に穿孔された耳の欠損痕が見られ、36のような形態の耳が2か所付くものである。36は扁平な円弧状を成す耳の部分の資料である。平たい半円形の粘土板を本体に貼り付けた後、穿孔をしている。35は瓦化が十分であるが、他は焼成不足で茶系の色調である。

磁器（37～40） 37・38は白磁。37は口縁部を波状に成型する。やや青みがかかった白色釉がかけられる。38は碗の口縁部である。端部を外方へ引き出す。外面に縦篋花卉文を施し、内面口縁下位に沈線を廻らす。白色釉を施す。太宰府分類の白磁碗Ⅶに類する。39・40は龍泉窯系青磁。39は口縁部を外方へ折り曲げ、更に端部を上方へつまみ上げるもので、体部内面に縦方向に凹線を入れ、菊



第5图 6·7·11号土坑实测图(1/40)

花卉状とする。黄緑色の釉が薄くかかる。太宰府分類の杯皿類。40は碗の底部で直に外へ開く高台である。見込みに沈線を廻らし、中央に花文を描く。薄いオリーブ色の釉をやや厚めに高台畳付まで施釉するが、高台内は環状に剥ぎ取って、中央に不整に釉が残る。碗Ⅳ類に属す。

SK06 (図版3、第5図)

調査区の南西隅で検出した径1.6m程の円形プランを呈する土坑である。検出時の埋土は黒色の灰とそれをドーナツ状に取り巻く青黒色粘土が同心円状に埋まっていた。土層断面を観察すると、地山に土坑を掘り、青黒色の粘土を貼り付け、そこに黒色の灰が堆積している。粘土を貼った段階で何かに使用し、その後、灰が堆積したのか粘土と灰の堆積が一連なのか不明である。また、本土坑の性格も不明と言わざるを得ない。陶器や染付などが出土した。

出土遺物 (図版4、第8図)

瓦質土器 (24) 火舎底部の断片資料である。平坦な底部には脚が付いていた痕跡が残る。内底部は煤が厚めに残り、外面にも煤の付着がある。二次被熱により器面は赤色化し、硬化が進む。

陶器 (25) すり鉢の底部である。ずんぐりとした高めの高台が付く。内面は細かい櫛目が密に入れられ、外面はヨコナデが施される。内外に煤の付着がある。赤褐色の白砂を含む胎土で、焼成は堅緻である。

磁器 (26~28) 26は白磁の小皿。口縁部は底部との境に稜を成し、直線的に延びて端部を尖らす。茶色の化粧土を施し、白色釉を全体に雑にかけるが、高台畳付には施釉しない。27・28は肥前系の染付である。27は所謂「くらわんか碗」で、外面に草花文を描く。28は低い高台の付く皿で、口縁端部は波打つように成形される。口縁部内面に花文を入れ、底部との境に2条の圏線を廻らす。中央にコンニャク印判五弁花が入る。外面は底部近くに圏線を廻らし、それと口縁部端との間に唐草文を施す。高台外面に2条、高台内に1条の圏線を廻らし、その中央に渦「福」銘を入れる。高台畳付には施釉されない。

SK07 (図版1、第5図)

調査区西辺の中央付近で検出した土坑である。2.3m × 1.9mの不整円形のプランで中位に30cm程のテラスが半周する。断面は円錐形に近い逆台形で、深さ80cm程を検出した。埋土はテラスより上位は茶褐色の砂質土で、下位は黒灰色粘質土である。白磁、染付、陶器などが出土した。

出土遺物 (図版1、第9図)

陶器 (41) 鉢の高台部の破片資料である。内面は鶯色の釉がかけられるが、底部は蛇ノ目剥ぎ状に幅広く釉が剥ぎ取られる。外面はどっしりとした高台が削り出されるが、高台内は深く削りこみ、底部の器壁を薄くしている。外面は無釉である。

磁器 (42~47) 42は白磁の碗で、ほぼ直立する口体部である。全体に緑味のある白色の釉がかけられ、内外に細かい貫入が認められる。43~47は染付である。43・44は「くらわんか碗」で体部外面に草花文を描く。高台外面に2条の圏線を廻す。45は口縁部片である。外面口縁部下に瓔珞文を描き、端部内面には圏線を入れる。呉須の発色は悪く、くすんでいる。46は口縁端部を欠く資料である。ほぼ直立する口体部で、細身の高台が削り出される。見込みに圏線を廻らし、中央に井桁状の文様を入れる。外面は草花文と思われる文様に入れられる。青味のある白色釉を全体に施すが、

畳付及び高台内は釉が弾け、赤褐色の化粧土が露呈する。47は壺の底部片。外方へ開く高台を削り出す。高台外面、体部に圈線を1条ずつ入れる。内面は茶褐色の化粧土が塗られ、底部まで釉垂れが認められる。高台畳付に砂目が残る。

SK11（図版3、第5図）

調査区西辺のほぼ中央で検出したやや大型の土坑である。浅い窪み状の掘り込みであるが、埋土は周辺の新期攪乱の埋土と明らかに違う埋土であった。4.8m×2.8mの不整楕円形のプランを呈し、深いところで25cm程を検出した。図示した土坑内の小ピットは土坑埋土と同様な埋土であったので図示したが、それぞれの関連性は不明である。土師器、輸入磁器が出土した。

出土遺物（図版4、第10図）

土師器（49～53） 49・50は小皿の破片資料である。復元口径6.9cm、器高1.8cmを測る。底部は糸切りで全体的に手捏ね状に不整である。50は復元口径8.1cm、器高1.5cmを測る。底部糸切りで、外面には板状圧痕、内面はナデ、他はヨコナデ調整である。黄橙色で焼成は良好である。51～53はいずれも底部糸切りの杯。51・52は小片のため、口径・器高とも不明である。53は大略1/3が残存し、復元口径11.1cm、器高2.4cmを測る。口縁部は強くヨコナデされ、内湾気味に立ち上がり、端部を尖らす。底部は糸切りで器壁を厚く切りはなす。外面には薄い板状圧痕が残り、口縁部は内外ともヨコナデ、内底部はナデを施す。胎土に砂粒は少なく精良で、乳橙色を呈し、焼成は良好である。

土師質土器（54） 片口の鉢の口縁部片で片口部が僅かに残存する。口縁端部は平坦面を作り、内外に引出して小突起を成す。外面は指頭痕が残り、口縁部付近はヨコナデを施すが、他はナデである。胎土に砂粒は少なく、黄橙色を呈するが、芯は黒灰色を成すほど硬質に焼成される。

磁器（55～57） いずれも龍泉窯系青磁碗の破片資料である。55は外面に稚拙なヘラ書き蓮弁文が入れられる。濁ったオリーブ色の釉が全体に厚めに施される。焼成は不十分で、胎土が橙色を呈する部分がある。56は口縁部を外方へ小さく折り曲げ、端部を丸める。茶色を帯びたオリーブ色の釉をかける。57はずんぐりとした高台部分である。高台外面下半を面取り状に削り、高台中位に稜を作り出す。透明感のある薄い緑色の釉が全体に厚くかけられるが、高台内は掻き取られ、砂目が残る。また、見込みにはヘラ書き花文が描かれる。

（3）その他の遺構と出土遺物

調査では性格不明の遺構を多く検出したが、既述のように新期の攪乱が及んでいて、出土遺物も錯綜し、取り上げるべき遺構を抽出しきれないところがある。ここでは、特に注意に上る出土遺物について述べる。

SP01（図版1、第3図）

調査区西辺の中央付近、SK07の東6mの所で検出した。径が60cm程の円形のピットだが、建物として拾える柱穴は見いだせずその性格は不明である。瓦当や染付が出土した。

磁器（58） 鉢の高台片である。高めの高台は内側へ小さく屈曲し外面に稜を作る。水色を帯びた白色釉が全体にかかるが、畳付は無釉である。見込みに花文が描かれる。

瓦当（59） 軒棧瓦の丸瓦部で、瓦当を径6cmの円形に凹ませ「大」字の浮彫を施す。

SE01 (図版1、第3図)

調査区の中央部で検出した。井戸枠用に焼いたと思われる瓦を並べ、4段以上を積んで井戸枠としている。直径80cmの円形プランである。掘削途中でアルミ缶やレンガ、ビニール等が出土し、枠の一部にはモルタルが塗られることなど新しいものと判断し、掘り下げるのも危険なため埋土除去を途中でやめた。攪乱土中から「深川製磁」の銘のある皿が出土した。

磁器 (60・61) セットになる白磁の皿である。薄い作りで、小さな高台が付く。見込みに金彩による竹林が描かれる。外面高台内には富士山を背景にした「fukagawa」「ARITA」のマークが金彩でスタンプされている。

(4) その他の出土遺物 (図版4、第6・11図)

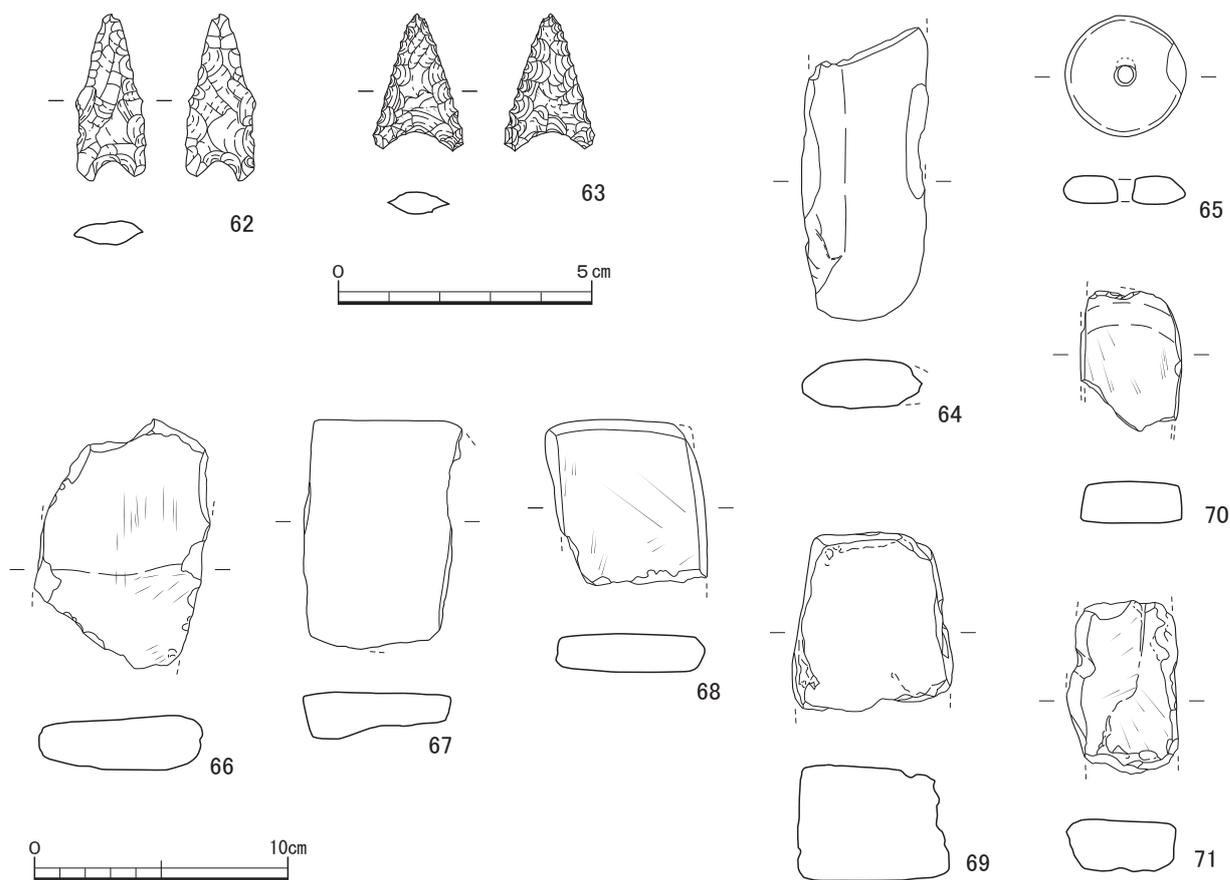
石鏃 (62・63) 62はサヌカイト製の台形鏃で抉りが入る。全長3.2cm、最大幅1.2cmを測る完形である。63は黒曜石製の三角鏃で、抉りは浅い。全長2.6cm、最大幅1.7cmの完形品。いずれも土坑からの出土であるが混入である。

石斧 (64) 蛇紋岩製の細身の磨製石斧である。頂部は欠損するが、幅4.8cm、厚さ1.8cmを測る。

紡錘車 (65) 土製品で、径4.6cm、厚さ1cmを測る。中央に径7mmの一方方向からの穿孔がされる。

砥石 (66~71) 66~68はSK05から出土した。砂岩製である。69・71はSK06から出土し、いずれも砂岩製である。70はSK01からの出土。砂岩製である。

陶磁器 (72~87) 72は高さ4cm程の小杯で、口縁は波状を成す。外面に蛸唐草文、下部に櫛形文を描く。口縁部内には四方禳文、見込みに松葉文を廻らす。73・74は色絵の小椀。73は外面に赤色の窓に花文を入れ、口縁内面に圈線を廻らす。見込みに抽象化した銘をいれる。74は外面に圈線に挟まれた草花文を描き、口縁部内面に圈線を1条廻らす。75は皿で、薄い呉須により内面に花文、外面に唐草文を描く。76は外面に草花文、口縁内面に雷文を廻らす。77は大きめの椀か鉢の口縁部で、外面に木の葉文、口縁部内面に如意雲文を帯状に廻らす。78は下膨らみの湯飲み椀。外面に山水飛鳥文を描く。見込みにも圈線を廻らし、中央に昆虫文を描く。79は皿か盤の高台である。全体に白色釉がかけられるが、豊付は露胎である。見込みに格子状文が描かれる。80は龍泉窯系青磁である。見込みに篋描きの花文を入れる。太宰府分類青磁椀I-2類。81は皿で、口縁部内面に松葉文を描き、見込みを蛇ノ目剥ぎする。82は皿で、見込みに蛇ノ目剥ぎを行う。口縁部内面に雨垂れ文を施す。83は外面に草花文、底部と高台に圈線を廻らす。高台内に抽象化した銘が入る。豊付は無釉で、砂目が付く。84は口縁を波状にする浅い皿である。蛇ノ目凹形高台で、見込みに山水松木文を描く。85は皿で、ほぼ完形である。口縁部内面に草花文と圈線を廻らし、見込み中央にコンニャク印判五弁花を押す。外面は唐草文を描く。高台内には圈線を廻らし、中央に抽象化した銘が入る。86は陶器で、鉢類の底部である。太めの高台に丸みのある底部が付く。底部はヘラ削り、高台部はヨコナデ、高台内はナデで調整される。胎土は砂粒を含まず、焼成は堅緻である。赤橙色で、内外に煤の付着がある。87は陶器で、すり鉢の口縁部片である。丸く内湾する体部に肥厚させた口縁が付く。外面口縁部下に2条の凹線を廻らす。内面は細かな櫛目が密に入れられる。胎土は黄白色で砂粒は含まず精良である。茶黒色の釉が薄くかけられる。



第6図 その他の遺物（石・土製品）実測図（2/3・1/3）

IV まとめ

後原遺跡は過去1地点、23次の調査が行われ、「筑前国続風土記拾遺」に記述のある白木原村の解明が進められてきた。報告書が未刊の地点があり、不明確な部分もあるが、22次調査の結果からも今回調査地が近世白木原の「本村」の可能性が言われている。今回の調査では近世陶磁器が出土したが、多くが近・現代の攪乱による出土で、明確な近世遺構として捉えきれなかった。以下、調査中や整理作業の段階で遺構として認識したものの性格や時期についてまとめる。

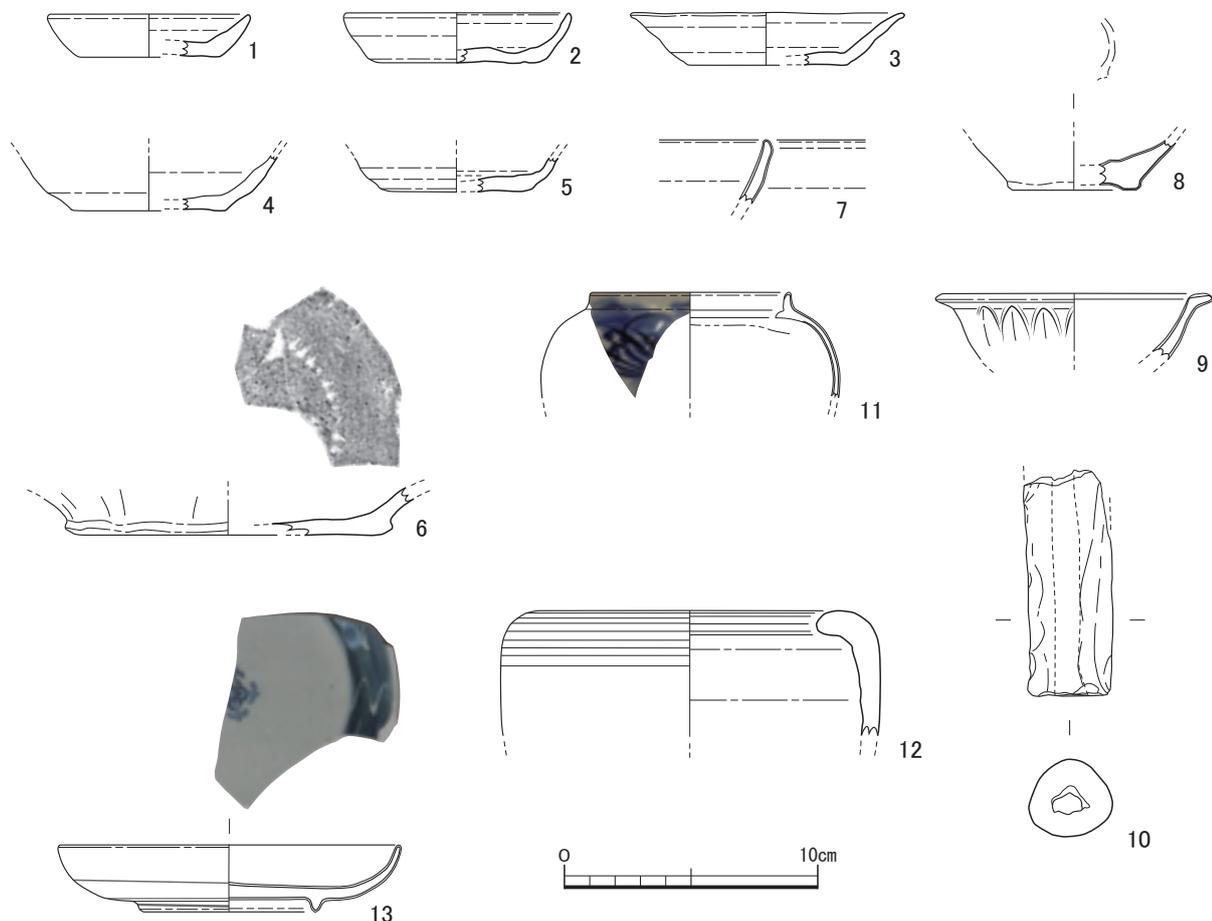
今回の調査の結果、遺構としては溝、土坑、ピット、性格不明遺構などがあり、遺物としては陶器、磁器をはじめ、石鏃、石斧、弥生土器、須恵器、土師器、瓦質土器、瓦等が出土している。遺構として把握できていないが、遺物が少量とは云え、縄文時代からこの地に人々の生活の痕跡があることが分かる。

中世に属すると考えられる遺構はSD01、SD03、SK05、SK11がある。SD01とSD03は調査区でカギ形に曲がる区画溝様のものと考えた。出土遺物に染付を含まず、土師器の形態や輸入陶磁器の特徴から14世紀後半～15世紀の所産と考えられる。また、SK05は埋土中に人頭大のグリ石が投げ込まれるなど、ゴミ穴的な性格のものと思われる。SK11は平面プランが不整で、大きな溜り状の形で検出したもので、その性格はわからないが、いずれにしても二つの土坑も出土土器の中には染付を含まず、溝出土土器と時期的に大差ないと考えられる。そうであれば、それぞれの関連性につ

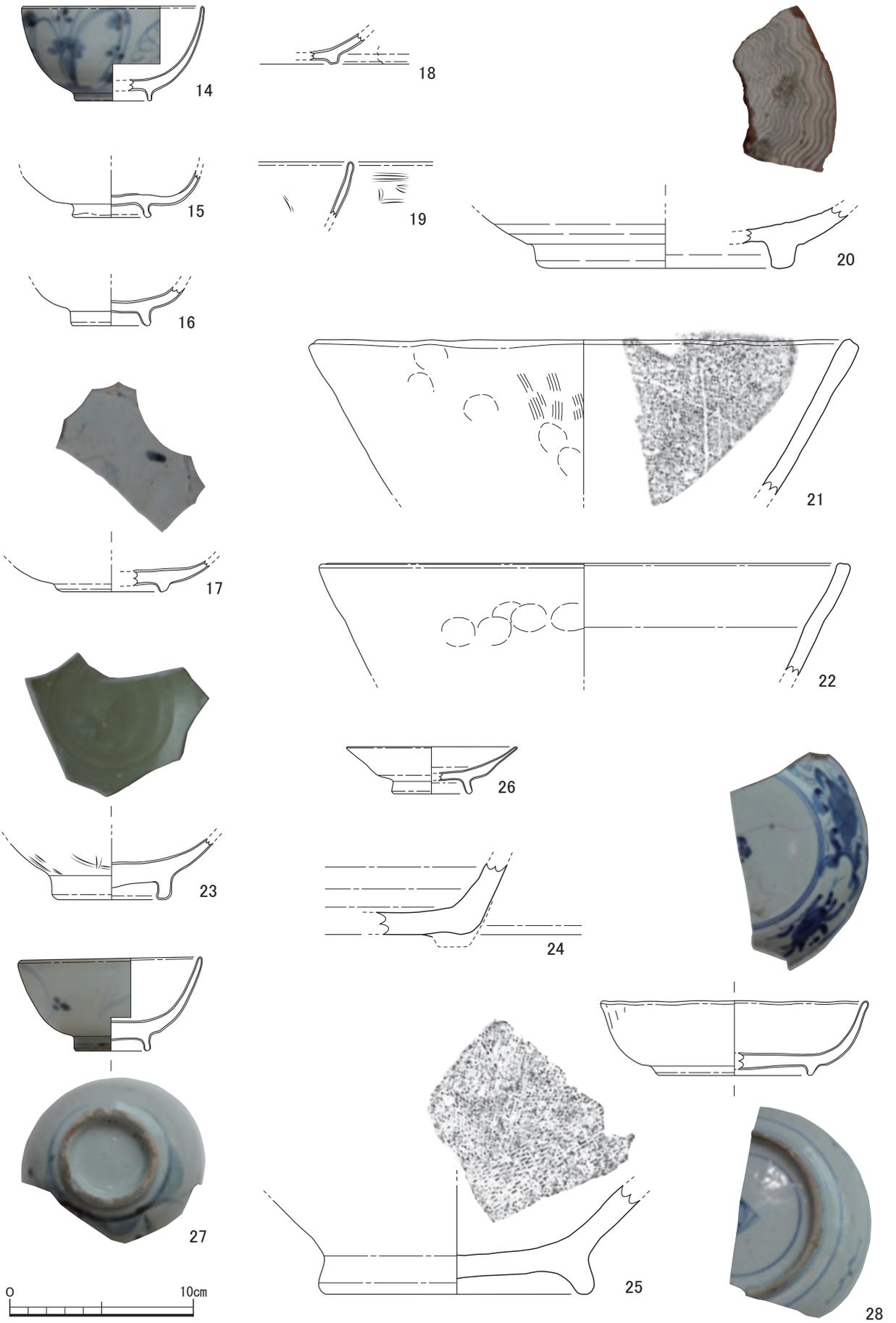
いては不明な部分が多いが、区画溝と生活痕であるゴミ穴という村の構成要素の一部を検出できたものと考えられる。

次に遺物の出土量が多いのは近世のものである。本書で報告した溝、土坑は大方がこの時期に含まれる。遺構は近・現代の攪乱と分離するのが難しく、他にも近世に属する遺構があるのかもしれないが、今後の精査の材料としたい。出土した染付は肥前産のものが多く、時期的にも18世紀後半頃からのものが多い。従前の調査報告でも村の西方に広がる墓地の最も古い墓碑銘は、18世紀後半のもので、出土した陶磁器類も18世紀後半～19世紀の年代観が与えられており、今回調査の結果もそのことを補充する結果となった。なお、江戸期後半の白木原村の繁栄に引き続いて、幕末・明治以降についても村は存続しており、更なる検討の余地がある。

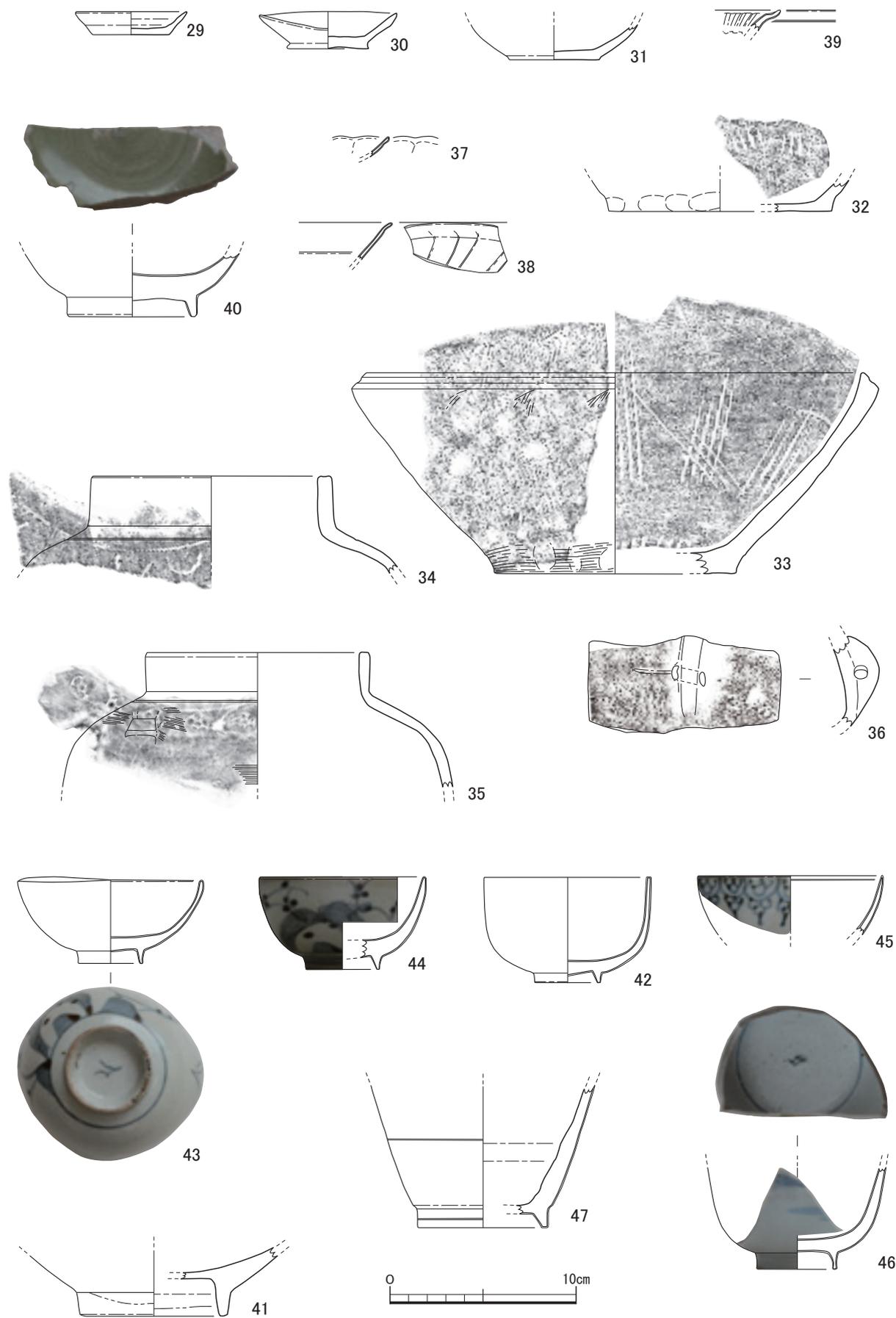
ところで、今回の調査で中世の遺構を検出し、遺構相互の関係性の詳細は不明確としても、中世の集落の一端を検出できた。『大野城市史』によると白木原の名が出てくる最も古い文献は明応八年（1499）正月二十四日、光明蔵禅寺々領田畠屋敷等注文（大宰府太宰府天満宮資料）である。それによる白木原の面積は不明だが、内、八反が光明禅寺（太宰府天満宮安楽寺配下）の「燈明田」として所領とされていたことが知られる。このことから、少なくとも16世紀には白木原村が存在したことが確認できるが、今回の調査結果から、それより更に遡り、15世紀には白木原村があったことを示す遺構として捉えられると考えられ、今回調査の大きな成果としてよいと思われる。



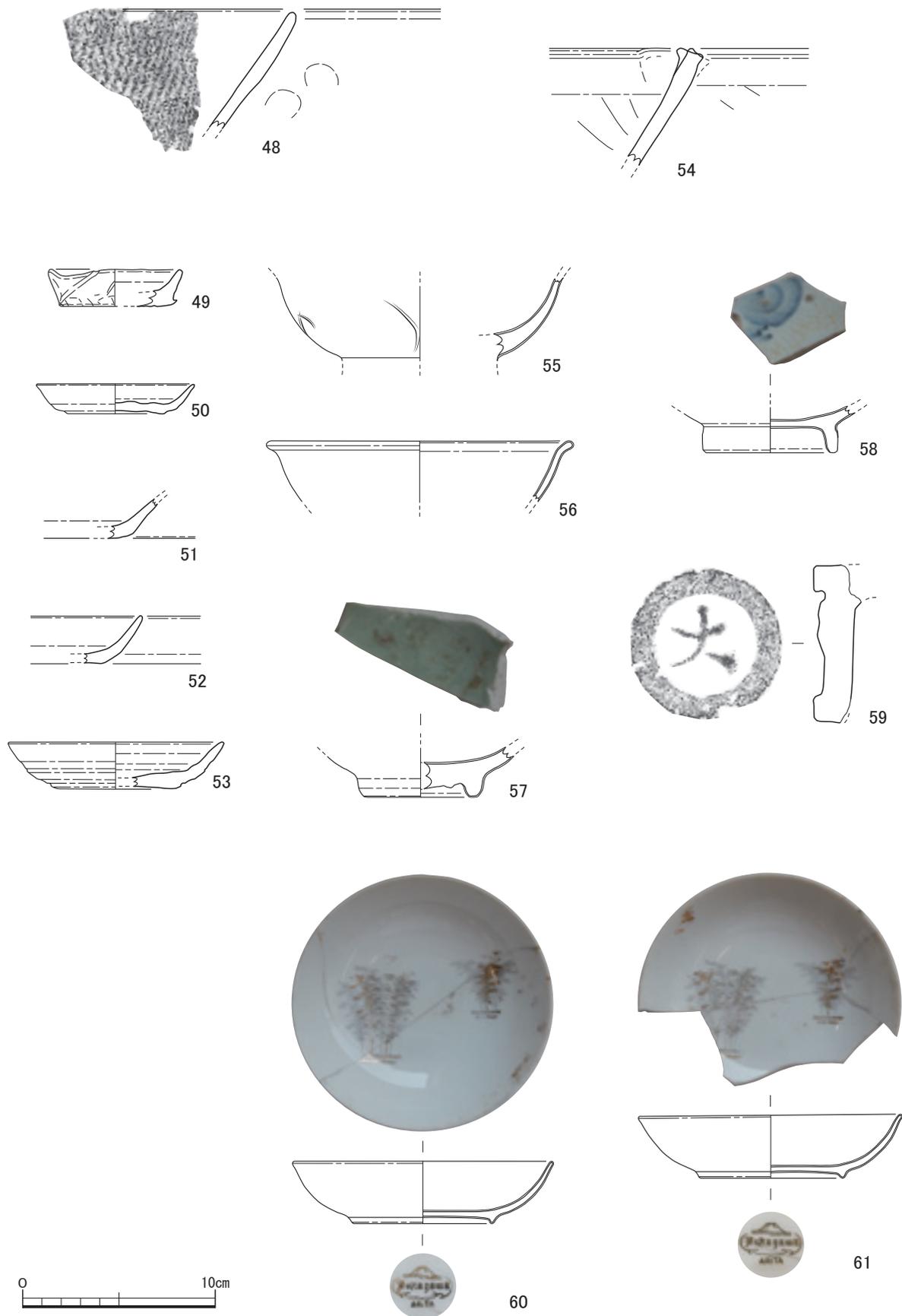
第7図 溝出土遺物実測図（1/3）



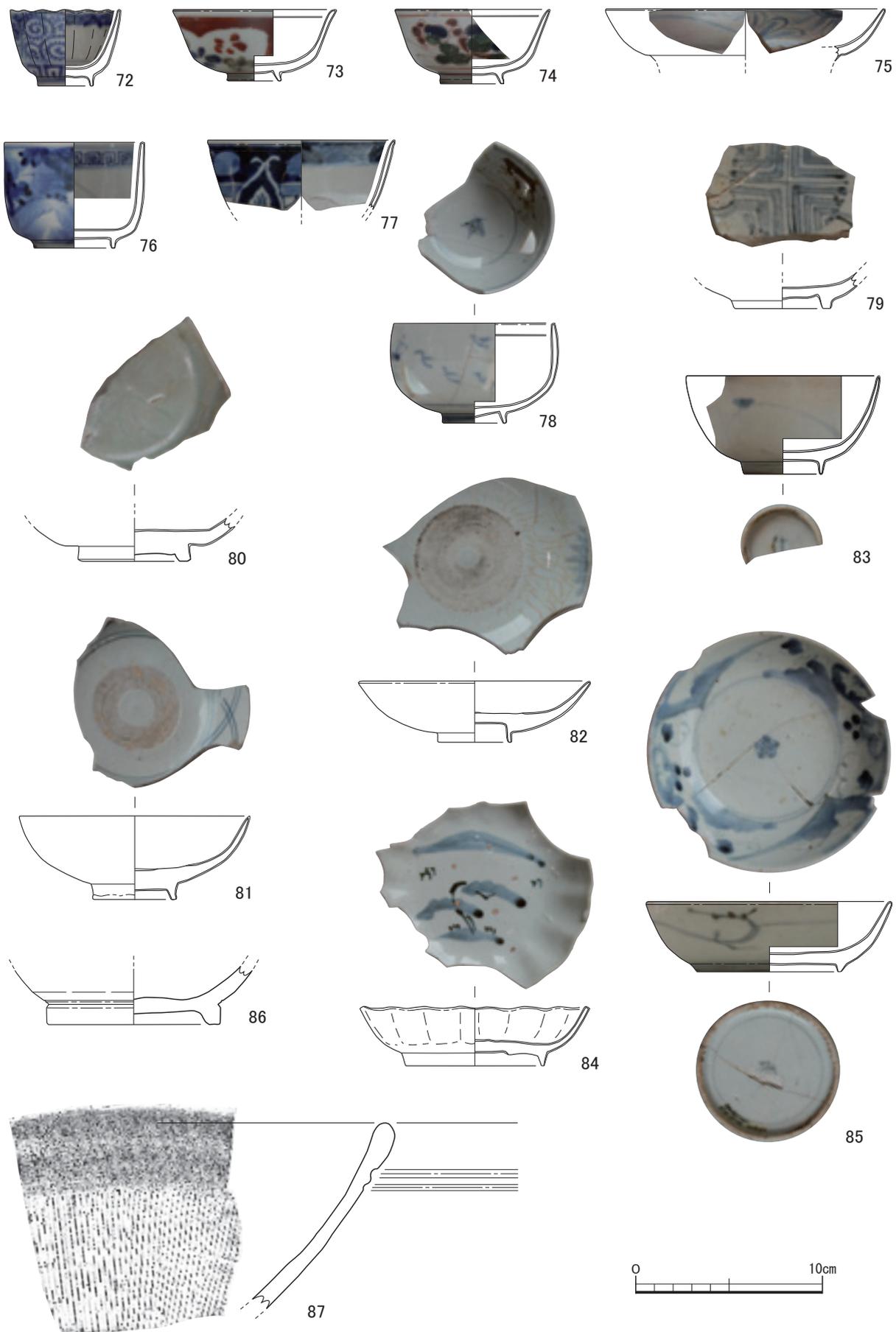
第8図 土坑出土遺物実測図1 (1/3)



第9図 土坑出土遺物実測図2 (1/3)



第10図 土坑及びその他の遺構出土遺物実測図（1/3）



第11図 その他の出土遺物実測図 (1/3)

圖

版



調査区東半全景



調査区西半全景

图版2



SD01 · 03



SD04 · 05



SK05

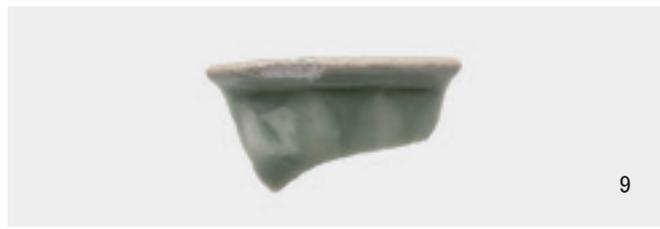


SK06



SK11

图版4



報告書抄録

| ふりがな | うしろばるいせき | | | | | | | |
|---------------|--|------|---------------|-------------------------|--------------------|---------------------------|--------|--------------|
| 書名 | 後原遺跡5 | | | | | | | |
| 副書名 | 第24次調査 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 大野城市文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第177集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 澤田 康夫 | | | | | | | |
| 編集機関 | 大野城市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒816-8510 福岡県大野城市曙町2丁目2番1号 電話092 (501) 2211 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2020年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 °′″ | 東経 °′″ | 発掘期間 | 発掘面積 | 発掘原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| うしろばる 後原遺跡 | 福岡県大野城市 白木原1丁目267-5他 | | | 33° 31′ 40″ | 130° 28′ 55″ | 20181029 ～ 20190130 | 1,200㎡ | 高層集合 住宅建設 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| うしろばる 後原遺跡 | 集落 | 中・近世 | 溝・土坑・ 不明遺構 | 染付・輸入陶磁 器・瓦質土器・ 瓦 | | | | |
| 要 約 | <p>後原遺跡は市域の中央部に位置し、過去に1地点、23次の調査が行われている。今回は、高層集合住宅の建設に伴い、概ね敷地面積に相当する1,200㎡を調査した。調査は場外への排土持ち出しが困難だったので、反転して2回に分けて実施したが、近・現代の攪乱が激しく、近世以前の遺構を把握するのに難渋した。また、調査区の北半はもともと標高が高かったものが重機により削平されており、深い遺構以外はなくなっている。近世以前の遺構として検出できたのは、溝、土坑がある。国産の染付を出す遺構はこれまでの調査で確認されている白木原村の構成要素として捉えられるが、染付を含まない溝と土坑が今回の調査では見つかり、白木原村が文献上知られるよりも更に古く、中世まで遡る可能性が窺え、今回調査の成果である。</p> | | | | | | | |

後原遺跡 5

第24次調査

大野城市文化財調査報告書

第177集

令和2年3月31日

発行 大野城市教育委員会

〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

出版 九州コンピュータ印刷

〒815-0035 福岡市南区向野1-19-1

